

ジャズを楽しむ

大阪大学名誉教授

長谷川 晃

要旨：今回はジャズを楽しんでもらうことをテーマに、科学雑誌として音階の科学の話と合せてジャズの話をすることにした。まず、人間の耳に聞きやすい長調のドミソのハーモニーを基本にする音階で楽器を作ると、どんな矛盾が発生し、この矛盾を解決した平均律をもつ現代の楽器は、厳密な意味ではハーモニーを持たない話をする。平均律を用いた楽器の生み出すハーモニーは元来不協和音であることを知ってもらい、続いて、不協和音の代表のようにいわれているジャズの基本音階を紹介する。幸い YouTube のおかげで紹介したい演奏をネット上で読者に聞いてもらうことができるので、百聞は一見に如かずではなく、百文は一聞に如かず、是非、この記事で参考にあげた YouTube を聞きながら読んでいただきたい。なお、文中には私が長年集めて来たジャズメンのサインを入れておいた。

1. はじめに

阪大には New Wave Jazz Orchestra という素晴らしい学生のジャズバンドがある。全国大学・専門学校のジャズバンドを対象とした山野ビッグ・バンド・ジャズ・コンテストで何度も入賞している。私が阪大入学当初、仲間とジャズバンドを始めた頃、ジャズは雑音の固まりか、カフェの音楽ぐらいに思われていた。当時と比べ、今の若者には、ジャズ感覚といい、演奏テクニックといい、驚くべき進歩が見られる。子供の頃からジャズを聴いて育っているのだろう、彼らのジャズのイメージは洒落たカフェでバックに流れている音楽といったものようだ。この為か、自然にジャズの演奏が出来るようだ。我々の年代では、ごく一部の人はジャズが好きで凝りに凝っているのがいるが、多くの人々は淡谷のり子の「別れのブルース」も Louis Armstrong の「Saint Louis Blues」も同じジャズ調のブルースだと思っている。ジャズで言うブルースはジャズの基本である。W. C. Handy 作の名曲「Saint Louis Blues」はその中でも最も多くのレコー

ドが作られたとされている古典的なブルースである。しかし、「別れのブルース」はブルースではない。こうした話をきっかけに、今回は趣向を変えて音楽、特にジャズの話をしてしよう。しかし、テクノネットは工学部の雑誌なので、まず「音楽の数学」の話から始める。西洋音楽の音階がどのようにして決められているか？よく知られているようで知られてないことが多い。ドレミファソラシドの音階がどのような周波数で決められているかご存知だろうか？クラシックコンサートを聞きに行くと演奏者がまず音合わせをする。第一バイオリンが A (ラ) の音を出し、他の楽器の奏者が音程のファインチューニングをする。この音は西洋音楽では 440 ヘルツと決められている。しかし、指揮者は会場の雰囲気などで 1 パーセントほど高く設定したり低く設定したりする。この為、絶対音階を持つ人はかえって困ると言われている。

人間の耳は 2 倍の高調波を同じ音と感ずる。これを 1 オクターブという。オクタは 8、則ちドレミの 8 番目の音が次のドとなり、丁度 2 倍の高調波となるという意味だ。1 オクターブの間にピアノの白キーはレミファソラシの 6 個ある。それではこれらのキーの音階がどのように決められているのか？純正律音階とは、平均律音階とはといった話を 2 章でする。

私はクラシック音楽もジャズも聴く。しかし、クラシック音楽はバロック以後、W.A.Mozart をボーダーラインとして後の作品は映画音楽だと思っているのであまり聞かない。この辺りから読者の反感を買いそうだが、実際この意見に同意してくれる方は多い。阪大基礎工を立ち上げられた故永宮阪大名誉教授などは W.A.Mozart 以後の時代では最も優秀な人材は科学者になり、二流の人材が作曲家になったからだ、と穿った、しかしもっともな意見を持っておられた。私がクラシック音楽の最盛期と思っている J. S. Bach で代表されるバロック時代の音楽は Polyphonic すなわち多音合奏が中心であった。しかし L.V.Beethoven 以降になると和音は使うが、Monophonic、単音合奏になる。

さらにメロディーで色んなモノを表現しようとする。だから映画音楽なのだ。バロック音楽ではリズムカルな通奏低音 (Basso Continuo) をバックに色んな楽器が色んなメロディーを奏でる。曲の流れ自体が面白く、何かを表現しようとするわけではない。場合によれば即興が入る。こうした演奏法はジャズにも通じる特徴でもある。第3章ではジャズの歴史やジャズを楽しむ為のガイダンスにあてる。

2. 音楽の基礎知識

ジャズの話をする為にはジャズの基本的なコード (和音) の流れであるブルースコードを知らなければならぬ。コードの話をする為には音階の数学的、或は物理的意味を知らねばならない。ドレミファソラシドの音がお互いにどのような周波数関係を持っているかは知られているようであり知られてない。多くの人には1オクターブ離れた2つの音階は2倍の周波数を持っていることは知っている。ドのキーを押した時の周波数は1オクターブ上のドの周波数の1/2、また、1オクターブ下の周波数の2倍の周波数を持つ。それではその間のレミファソラシのキーの周波数はお互いにどんな関係があるだろうか。どうしてミとファの間、シとドの間は他のキーの間の半音階なのか？

まず我々の耳に心地よく感じられる和音、同時に音を出した時に心地よく感じられる音の間の周波数関係をみてみよう。1オクターブ離れた2つの音は同じ音に聞こえる。これは周波数が2倍の関係にあるからだ。周波数が2倍でなくてもお互いの周波数が整数倍同士であれば、和音としてとらえられ、耳には心地よい。これは一つの弦をつま弾いた時に発生する高調波がお互いに整数倍の周波数関係を持つからだ。

両端が固定されている弦の基本周波数は波長が弦の長さの2倍、その上は波長が弦の長さ、その上は波長が弦の長さの3/2、その次は1/2、等々となる。周波数は波長の逆数で与えられるから、これらの弦の振動

の周波数は基本周波数を f として $2f, 3f, 4f, 5f, 6f, \dots$ となる。これらの周波数は一つの弦が出す音だから、全てがお互いに和音の関係を持つ。ピアノやギターを習い始めた時に最初に習う和音はドミソの和音 (基本3和音) である。これは $4f$ をド、 $5f$ をミ、 $6f$ をソに当てた時の和音である (これをハ長調又はCコードという)。この結果、ドに対するミとソの周波数比はそれぞれ、 $5/4$ 、 $3/2$ となる。つまりドの周波数を1と取ると、ミは $5/4$ 、ソは $3/2$ の周波数を持つ。これで基本3和音のド・ミ・ソの周波数をドの周波数を基準に決めることが出来る。次に他の音程をどうして決めるかを考えよう。

黒のキーを使わない基本3和音はファラド (ハ長調又はFコード)、ソシレ (ト長調又はGコード) の3音からも構成される。ドの周波数が分かっているので、ファラドの基本3和音を使ってファとラの周波数を決めてみよう。基本3和音ファラドでのドは先のドミソの和音のドの1オクターブ上のドになるから、2の周波数を持つ。この周波数がファの周波数の3番目の基本和音、 $3/2$ 、となるようにファの周波数を決めると $4/3$ となる。次にラの周波数はファの周波数 $4/3$ の2番目の基本和音、 $5/4$ 倍として $5/3$ で与えられる。これでファとラが決まった。続いてシとレを決めよう。これにはソシレの基本3和音を使う。まず、シに対してはソの周波数 $3/2$ から数えて2番目の基本和音、 $5/4$ に当たるから、 $15/8$ となる。またレの周波数は1オクターブ下のソの周波数 $3/4$ から数えて3番目の基本和音、 $3/2$ となるから $9/8$ で与えられる。以上でドの周波数を1とした時のレミファソラシの周波数が決められたことになる。以上の結果を表にすると下図のようになる。この表を見て奇妙に思えるのはミとファ、及びシとドの半音階の間の周波数比はどちらも $16/15$ となっているのに、ドとレ、レとミの周波数比はどちらも全音階であるのに $9/8$ 、 $10/9$ と違う値になっていることに気づく。同様に全音階であるファとソ、ソと

	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
基音のドに対する比	1	$9/8$	$5/4$	$4/3$	$3/2$	$5/3$	$15/8$	2
直下の音に対する比 X	$16/15$	$9/8$	$10/9$	$16/15$	$9/8$	$10/9$	$9/8$	$16/15$
上記の対数 $\log_2 X$	0.093	0.170	0.152	0.093	0.170	0.152	0.170	0.093

ラ、ラとシの周波数比も2種類の異なった値となっている。つまり、全音階間の周波数比は全て同じ値にはなっていない（つまり等比級数にはなっていない）。このことが短調を考えた場合に矛盾となって現れる。

それでは次に短音階（短調）を考えよう。短調の基本3音階では3度の音を半音下げる。この結果、短調の基本3音階の周波数比は10:12:15となる。つまり、基音に対し、3度との比は5:6にする。しかし、5度との比は長調と同じ2:3である。白の鍵盤だけで短調を弾くにはラを基音にとると自然に3度の音（つまりドの音）が半音下がった音になる。短調ではこの他に、レファラ、ミソシが黒キーを使わない基本3音階を作る。こうしてラを基音にして以前と同様にドレミファソラシドの音階を決めることが出来る。このようにして決められた音階を純正律音階という。ところが、純正律音階には困ったことが存在する。それはドとレの周波数比が長調で決めた時には8:9であったのに、短調で決めると9:10になってしまうことである。そのため、長調用の楽器と短調用の楽器を別に作らねばならないし、さらにハ長調の曲の途中でイ短調のレファラの音が現れると、汚い音になってしまう。

見識ある科学者は上記の表を見て奇妙に思うに違いない。音階はそもそも1オクターブごとに2倍の周波数比を持つものであるから、ドの音の1オクターブ上のドは2倍、さらにもう1オクターブ上のドは4倍、その上は8倍と等比級数的に周波数は上がってゆくはずである。このため、1オクターブ下の周波数との比の2を底とする対数は全て1になっていないといけな。さて、1オクターブの間には半音階が12個ある。それはドとレ、レとミ、ファとソ、ソとラ、ラとシの間が1音階、ミとファ、それにシとドの間が半音階だから半音階で数えて12音階がある。1オクターブを12個の等比級数で分割すると半音階ごとに周波数は2の1/12乗づつ上がるはずであるので、1音階では2の1/6乗上がる。従って直下の音との周波数比の2を底とする対数は1音階離れておれば1/6(=0.167)、半音階離れておれば1/12(=0.083)となるはずである。このようにして1オクターブの間の12音階を決めるのが平均律である。上記の表で、こうして決めた平均律音階と純正律音階を比較すると、純正律音階は平均律音階とおしなべてずれており、特に、シとドの間、

ミとファの間、及びレとミ、ソとラの間ではそのずれが大きいことがわかる。この結果、純正律を使った楽器ではハ長調の途中でイ短調の両方の和音を出そうとするとすごく汚い音になってしまう。

平均律音階では半音階離れた2つの音階の周波数比は2の12分の1乗(=1.059)、1音階離れた2つの音階の周波数比は2の6分の1乗(=1.122)で与えられるように隣接する音階の周波数比は常に一定（しかし無理数）になるように決められている。現在市販されている楽器は他の楽器との合奏が可能になるように殆ど平均律音階を持っている。しかし、平均律は論理的だが基本和音同士（ドミソなど）は整数倍の周波数にならない問題がある。和音に敏感な耳を持っている人には平均律楽器でドミソの和音を奏でると、気持ち悪く感じるはずである。幸い大抵の人の耳はアナログで聞いているので、無理数を有理数で聞くようになっていて、不快感を持たなくて済むようだ。

3. ジャズの概要

ジャズの音楽的な基本はオフビート（2拍目と4拍目を強調する）の4拍子のリズムをもつブルースコードとそれをベースとした即興演奏である。ブルースコードとはC7 C7 C7 C7 F7 F7 C7 C7 G7 F7 C7 G7のコード進行を持つ12小節（1コーラスという）の和音の流れで、Cはド、Fはファ、Gはソを基音とする和音、7は7番目の音（C7の場合はシの音）を半音下げた音を表す。ブルースコードは基本的には長調で時折3度の音（C調でミの音）を半音下げるので短調に聞こえることもあるが、6度の音（C調ではラの音）は半音下げないので短調ではない。このためジャズの音階は、演歌と違い、涙の枯れた（乾いた）メランコリーなモノになっている。ブルースという名前は戦前から日本の流行歌に取り入れられ、日本人にもなじみ深い曲が多いが、これらはいずれもジャズ本来のブルースではない。一例を挙げて説明しよう。戦前から馴染み深い日本の流行歌の「ブルース」の代表は1937年に服部良一によって作曲され、淡谷のり子が歌った前述の「別れのブルース」であろう。この歌は子供心にも訴えるものがあり、幼稚園の頃私もよくレコードを聞いて一緒に歌っていた。どのレコードが他のものと区別できるように文字盤に針で傷を付けてお

いたものだ。

歌詞は「窓を開ければ港がみえる、メリケン波止場の灯が見える、酔う（よー）風 潮風 恋（濃いー）風乗せて 今日の出船は 何処へ行く。 むせぶ心ーよ、果敢ない恋よ、踊るブルース（ぶずうず）の切なさーよ」と言うものだが、意味は分からず、（）内は子供の私が歌っていた歌詞だ。ブルースのことをブズウズと歌っていたのを思い出す。

ご存じない方の為にオリジナルの歌 YouTube のアドレス <http://www.youtube.com/watch?v=GXm0mSmj> を記しておくので聞いてみてほしい。殆どの歌謡曲が短調の 32 小節（16 小節の繰り返し）であるのに、この曲は歌謡曲としては珍しく 24 小節の曲で、ジャズのブルース曲 12 小節の繰り返しに似た編成になっているためにブルースの曲の形式をとっている。しかしコード進行は完全に短調（minor）でブルースコードは使っていない。歌謡曲の典型、短調の 16 小節の曲に 8 小節を加えて 24 小節にしている。つまりブルースではない。しかし想像するところ、この曲が日本人にブルースとして受け入れられてきた理由は他にもありそうだ。それはジャズの代表的なブルース曲である「Saint Louis Blues」との比較で分かる。W. C. Handy が 1914 年に発表したこの曲は最も多くのレコード盤が作られたジャズの名曲である。参考の為に Louis Armstrong の演奏を紹介しておくのでは非これも聞いてみてほしい。 http://www.youtube.com/watch?v=D2TUIUwa3_o

Louis の演奏は他の「Saint Louis Blues」の演奏と同様 16 小節のインターラードから始まっている。しかもこのインターラードは 16 小節の短調である。日本人の多くが「Saint Louis Blues」として知っている馴染み深いメロディーはこの 16 小節の短調のメロディーだ。Saint Louis woman wares her diamond ring, she pulls man around by her apron string, if it wasn't for the powder and that store bought hair, say that man I love wouldn't have gone nowhere, no where という歌詞のつくこのメロディーは先述の「別れのブルース」のはじめの 16 小節のコード進行に似ている。しかし、本当のブルースはこのインターラードに続く 24 小節の部分なのだ。ルイの演奏は上記のインターラードから始まるが、合奏の後に続く Velma

Middleton の歌は I hate to see that evening sun go down, yes, I hate to see that evening sun go down, 'Cause it makes me feel like I am on the last go round. If I'm feeling tomorrow like I feel today, yes, feeling tomorrow like I feel today, I'm gonna pack my trunk and make my get away. からなる本来の 12 小節のブルースの繰り返し部分から始まり、上記の 16 小節のインターラードに繋ぎ、そして 12 小節のブルースで終わる。つまり「Saint Louis Blues」は本来 24 小節のブルース、16 小節の短調のインターラード、そして 12 小節のブルースの構成からなっているので、短調の部分は本来のブルースではないのだ。服部良一はおそらくこのことを承知の上で、短調のインターラードの部分に 8 小節の短調のメロディーを付け加えて 24 小節にしてブルースに似せた、しかも、日本人の好きな短調の歌謡曲を作り上げたのであろう。

ジャズのリズムはオフビート（2 拍目と 4 拍目にアクセントをつける弱強弱強）が基本であるのに対し、歌謡曲や日本民謡はオンビート（1 拍目と 3 拍目にアクセントを付ける強弱強弱のリズム）が基本であるため、一昔前にはジャズの演奏中、観客が手拍子を打ち始めるとオンビートで打つので演奏が裏になって極めてやりにくく困ったものだった。ところが最近の阪大の New Wave Jazz Orchestra の演奏などを聴きに行くと若者は自然とオフビートで手拍子を打っている。50 年ほどの間に日本人の音楽感覚は大きく変わったものだと感心する。しかし、お能の鼓は場面が切迫してくるとオフビートで叩くのでオフビートは古来から日本に存在するようだ。

4. ジャズの歴史

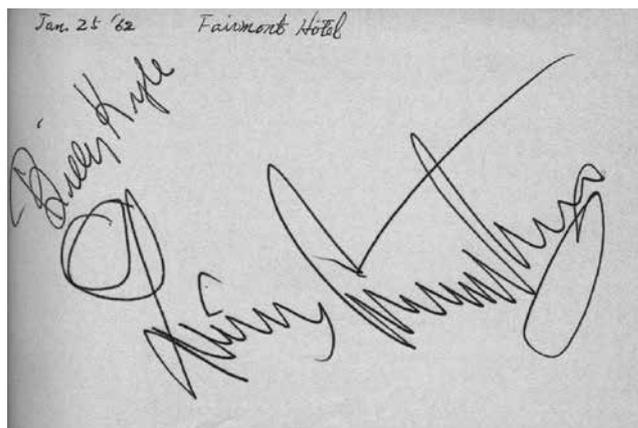
前置きがずいぶん長くなってしまったが、ここいらでジャズの歴史の話をすることにしよう。ジャズは即興を基本とする音楽である為、曲目よりも演奏者が大事で、そのため、演奏者の名前を知っておく必要がある。少しジャズに親しむと気に入った演奏から演奏者の名前をノートして覚えておくのが良い。ジャズの歴史はレコーディングの歴史に一致する。SP レコードが出来たのは 1910 年頃だが、最初のジャズのレコーディングは Original Dixieland Jazz Band が 1917 年に機械式録音で入れた曲「Darktown Strutters' Ball」

と言われている。今からほぼ100年前になる。78rpmのSPは片面3分程度の録音しか出来ない。当時のジャズはこの時間内に一曲が入るように演奏したのでよく3分芸術と言われている。この傾向は1950年代にLPレコードが誕生するまで続く。LPレコードが出来てからはもっと長い演奏が普通になる。

詳しいジャズの起りなどについては専門書に任せることにして、1920年代までに完成したデキシーランドジャズとよばれる初期のジャズの話から始めよう。

4.1 デキシーランドジャズ (Dixieland Jazz)

ジャズの起りには諸説があるが、奴隷として連れられて来たアフリカの黒人が持って来た音楽に西洋音楽の影響が加わって楽器（主に管楽器）で合奏するようになったのが始まりと言われている。ジャズが音楽として完成した当初の編成はトランペット、クラリネット、(後にはテナーサクソも加わる)、トロンボーン、それにリズムセクションとして、ドラム、バンジョー、チューバ、後にはコントラバス、ギターなどが楽隊の構成で、この編成でのジャズは1930年代半ばまで続く。これをデキシーランドジャズと呼んでいる。即興が基本であるジャズでは演奏者が重要であることは前述の通りだが、レコーディングが残っている1920年代から30年代初頭でのジャズで重要な演奏者は、黒人奏者では先に紹介したトランペットのLouis Armstrongと彼の楽団、白人ではコルネット奏者のBix Beiderbeckeとその楽団だ。1901年生まれのLouisは1971年までジャズの歴史とともに生きたジャズの巨人の一人だ。少年期にいたずらして放り込まれた少年院で習ったコルネットでジャズを始め、いくつかの一流バンドで演奏させてもらった後、自分の楽団を編成して素晴らしいジャズのレコーディングを残している。コロムビアレコードから出ている彼のHot FiveやHot Sevenの楽団の演奏が素晴らしい。<http://youtu.be/yEUtEH0c13c> 当時彼は楽譜が読めず、耳で聞いて覚えた曲を即興で演奏している。1930年代には後述するフルバンドによるスイングジャズが盛んになり、デキシーランドジャズは一時廃れることになる。しかし1950年代に復活し、Louisも再度脚光を浴びるようになる。3章で紹介したYouTubeでの録画は1950年代のものだが、成熟したデキシーランドジャ



1962年1月 San Francisco Fairmont Hotel で頂いた Louis のサイン。左上はピアノの Billy Kyle のサイン。

ズを演奏している。

一方白人の演奏するジャズも盛んで当初は主にダンスバンドとして踊りの伴奏が主だったが、こうした音楽に飽き足らず、即興を中心とする聞くジャズを始めたのが Bix Beiderbecke である。Bix のジャズもデキシーランドジャズのスタイルと楽団編成を持っているが、Louis らのデキシーと区別して Chicago Jazz とも呼ばれている。これに対し Louis らの黒人のデキシーは New Orleans Jazz と呼ばれている。New Orleans Jazz が土臭いのには比べ白人の Chicago Jazz は洒落た演奏をする。筆者が学生時代にやっていたジャズはこのシカゴスタイルのジャズである。アメリカを訪れた時、師匠の Bix のお墓を先ず訪ねて写真に収めたものだ。1903年生まれの Bix は Louis と違って28歳で酒に溺れて若死した為、あまり多くの作品を残していないが、自分のバンド、Bix Beiderbecke and his Gang の名前で残しているLP3枚程度の曲はどれも素晴らしい。<http://youtu.be/ZxP0cflbpTM>.

この演奏 At the Jazz Band Ball を聞くと、ベース楽器にバスサクソを使い全体の音を柔らかくする工夫が見られる。彼の生涯での演奏は17枚程度のLPに収録されたものがあるが、しかしその多くは Paul Whiteman というダンスバンドの中での「掃き溜めに鶴」と良く言われている短いソロである。

デキシーランドジャズは葬式の伴奏などを行っていた原始的な形式の黒人たちの管楽器の合奏が起りだとも言われているが、1920年代に出現したデキシーランドジャズは Louis にしても Bix にしても、大きなダンスバンドでの演奏に飽き足らなくなったジャズメン



Chicago Jazz の巨匠 Bix Beiderbecke の墓の前の若い筆者

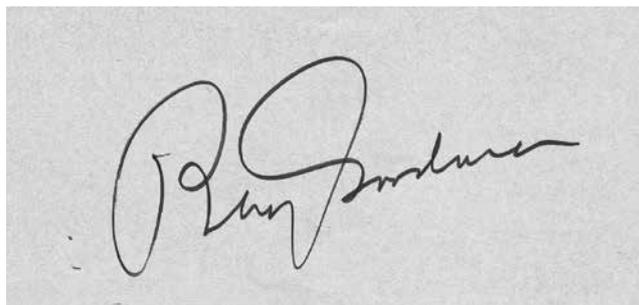
が思い切り即興を楽しんで演奏できる小規模編成の聴くための音楽を作ったのが本流のデキシーだと私は思っている。

デキシーランドジャズの楽しみは何と言ってもトランペット、クラリネット、それにトロンボーンの織りなす即興アンサンブルだ。其々の楽器が曲の和音進行(コード)をベースにトランペットがリードするメロディーに絡まるようにしてクラリネットやトロンボーンが演奏する、polyphony の魅力だ。

デキシーランドジャズは 1950 年代に再度復活し、Armstrong も新しいグループを結成して各地でコンサートを開いている。また Bix Beiderbecke の流れを汲むシカゴジャズは Eddie Condon のグループが復活させ多くの楽しいレコーディングを残している。

4.2 スイングジャズ (Swing Jazz)

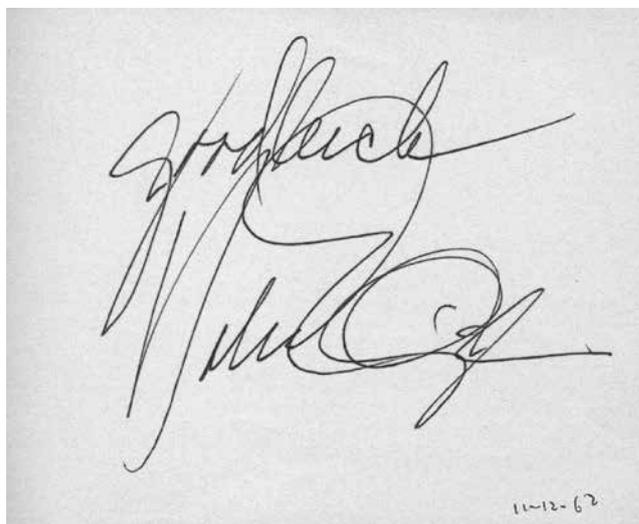
1930 年代の半ばには、それまで主にダンスバンドの役割をしていたフルオーケストラのジャズが、聴く音楽として楽しめるようになり、デキシーランドジャズは廃れ始める。こうして誕生した新しいジャズをスイングジャズと呼んでいる。聞いていて体が揺れる、swing する、ことが名前の由来であろう。スイングジャズの全盛時代の 1938 年に白人の Benny Goodman が行ったニューヨークのカーネギーホールでのコンサートは、レコードに収録されていて、実に素晴らしいものだ。この演奏会はクラシックの殿堂における初めての聴くジャズの演奏会として、また、白人が黒人のジャズメン達と共演した歴史的な出来事でもある。なかでもここでの sing sing sing は歴史に残る名演奏である <http://youtu.be/dbzXS49937A>



1938 年のコンサートを記念して 1974 年にカーネギーホールで行われたコンサートの時の Goodman のサイン。

スイングジャズでは二つの黒人バンドが重要な役割を果たす。一つは Duke Ellington のバンド、このバンドは 1920 年代からニューヨークのハーレムで演奏を始め、既に有名になっていたが、スイングジャズ全盛時代にはその重苦しく、うめくような演奏がますます冴えて来て、聴くジャズに加わる。Ellington はクリエイティブな作曲家としても有名で、自作自演の曲も多い。日本には Ellington しかジャズと思っていない Ellingtonian と称する熱烈なファンがいる。

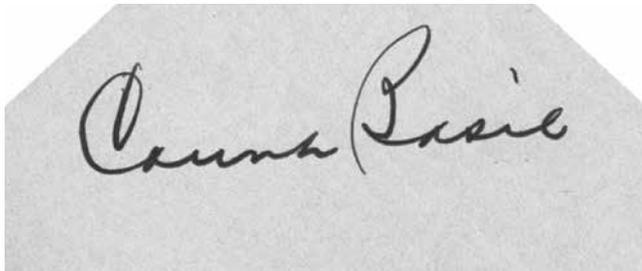
http://youtu.be/D6mFGy4g_n8では、Ellington のテーマソング Take the "A" Train が聞ける。



1962 年カリフォルニア大学バークレー校での演奏会のおりにもらった Duke Ellington のサイン。
Good Luck, Duke Ellington とある。

スイングジャズのもう一つの巨頭は Count Basie だ。Ellington と違い、Basie のは正にスイングするジャズで、噛み付くようなフルバンドの合奏の合間に Basie のピアノソロが素晴らしいリズムセクションをバックに淡々と聞こえてくる妙味は何とも言えないも

のがある。<http://youtu.be/4Qgy0yfJAL4> では Basie のスタンダード One O'clock Jump が聞ける。今や伝統的となった阪大の New Wave Jazz Orchestra はこの Basie のスタイルを踏襲している。



Count Basie の 1963 年のサイン。

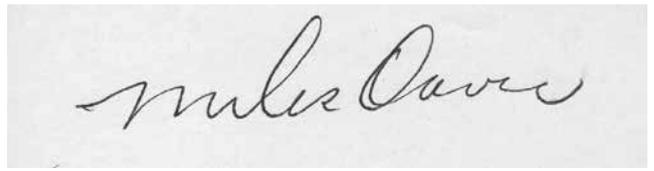
Ellington も Basie も素晴らしいソリスト達を揃え、育てているのも見逃せない。Ellington Band の Johnny Hodges、Benny Carter、Ben Webster、それに Basie Band の Lester Young、Frank Wess など、独自のグループやソリストとして活躍している。

スイングジャズとして他に映画にもなった Glenn Miller のバンドがあるが、ハーモニーを重視しすぎて良いソロが聴けないのでジャズの主流とは見なされていない。

4.3 モダンジャズ (Modern Jazz)

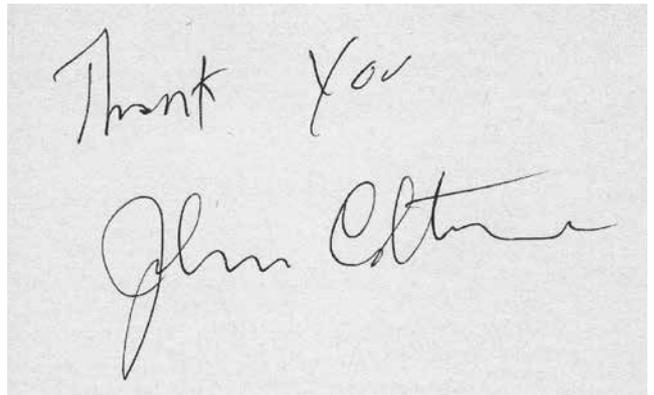
第 2 次世界大戦が終結し、世の中が落ち着き始め、スイングジャズに飽き足らなくなった頃、前衛的なジャズミュージシャンの Dizzy Gillespie や Charlie Parker らが出現し、非常に複雑なコード進行と早いテンポのビーバップと呼ばれるジャズを生み出す。1950 年代半ばにはこうした流れに刺激された若手の黒人ジャズメンが多数誕生し、中でもトランペットの Miles Davis はビーバップの手法を取り入れながら静かでも情熱的な演奏をするクールジャズと呼ばれる新しいスタイルの演奏を始めた。これが現在でもそう呼ばれているモダンジャズの形態を創出することになる。

デビュー当初の Miles は有名な先輩達に混じって演奏していたが、1950 年代半ばには無名の新人を集めて自分の 5 重奏団を結成し、モダンジャズのお手本となる素晴らしい演奏の数々をレコーディングすることになる。後にモダンジャズのテナーサックスのお手本



モダンジャズの巨匠、Miles Davis のサイン。サンフランシスコの Black Hawk で。

のような存在となった John Coltrane もその一人である。<http://youtu.be/6w4FI0Jq0II> では 1959 年に Miles のバンドで演奏する Coltrane が聞ける。これがほぼ 10 年後にはずいぶん前衛的な演奏になる。<http://youtu.be/oGaQA2L3Jp8> こうして Miles はほぼ 10 年ごとに変化し、筆者にはだんだん聞きにくくなり、しまいにはついていけなくなった。



モダンジャズのテナーサックスの巨匠 John Coltrane のサイン、1962 年 4 月。

Miles とゆかりのある優れた黒人ミュージシャンは他にも多数あり、中でもピアノの Horace Silver、同じく Thelonious Monk、テナーサックスの Sonny Rollins などは其々のグループのリーダーとして活躍している。またゆかりは薄い重要なピアニストとして Oscar Peterson、ベースの Charlie Mingus、若死にしたトランペットの Clifford Brown、などがモダンジャズの巨匠達だ。

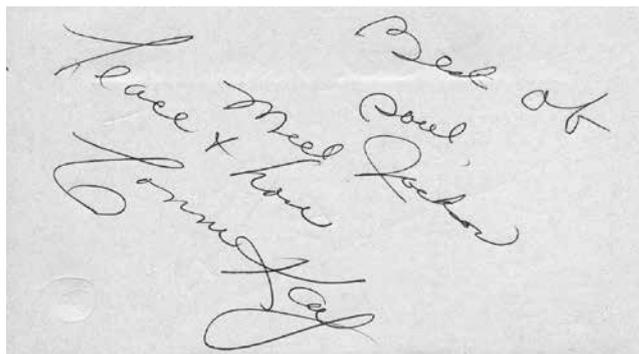
モダンジャズのプレーヤーで非常に優れた演奏をするユニークなグループに John Lewis (piano)、Milt Jackson (vibrahorn)、Percy Heath (bass)、Kenny Clark、後には Connie Kay (drums) の Modern Jazz Quartet (愛称 MJQ) がある。このグループは管楽器無しで静かではあるが極めて情熱的でドライブの効いた演奏をする。特にパイプの Milt Jackson は素晴らしいテクニックと感性 (soul jazz とも呼ばれている)

をもって、いつ聴いても楽譜無しで宙を眺めながらリーダーの John Lewis の複雑なアレンジを淡々とソウルフルに演奏する。Jackson のクールでブルーな演奏に後ろで素晴らしいドライブをかけるのがベースの Percy Heath だ。リーダーの Lewis は訥弁のピアニストだが、一つ一つのキーを考えながら叩くのが面白い。Milt Jackson が書いた Bag's Groove <http://youtu.be/oU5PAZWBvJYd> は私の大好きな演奏だ。

彼らはバンド結成後 20 年間ほど世界の各地で演奏会をしていたが、1974 年に Last Concert と称して演奏会をした時のレコーディングが特に素晴らしい。

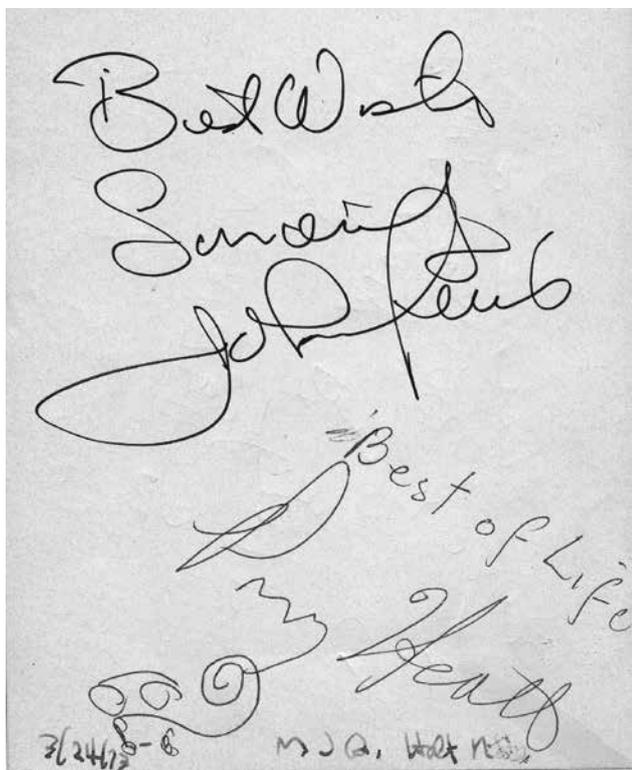
モダンジャズにはジャズを芸術として開花させた功績が大きい。デキシードジャズがほぼ 20 年、スイングジャズもほぼ 20 年続いたのに対し、モダンジャズはいまだにモダンジャズとして 60 年も続いている。

モダンジャズでは白人も素晴らしい活躍をしている。彼らの演奏は主に活躍していたのがロス近郊であったことからウエストコーストジャズ (West Coast

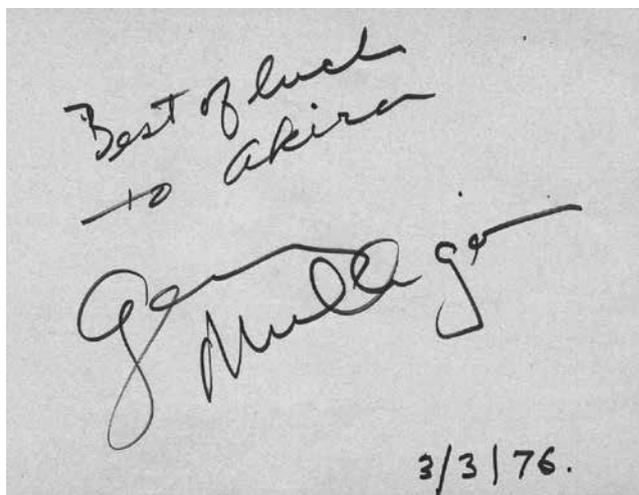


MJQ の Milt Jackson (Best of Soul のサイン) と Connie Kay (Peace and Love のサイン)。

Jazz) と呼ばれ、中でも Woody Herman のビッグバンド出身のテナーサクソ奏者の Stan Getz やバリトンサクソ奏者の Gerry Mulligan はウエストコーストジャズの代表格で、素晴らしい存在だ。特に Stan Getz が黒人のトロンボーン奏者の J. J. Johnson と共演した Opera House でのレコーディングでは素晴らしい即興の絡み合いを聴くことができる。

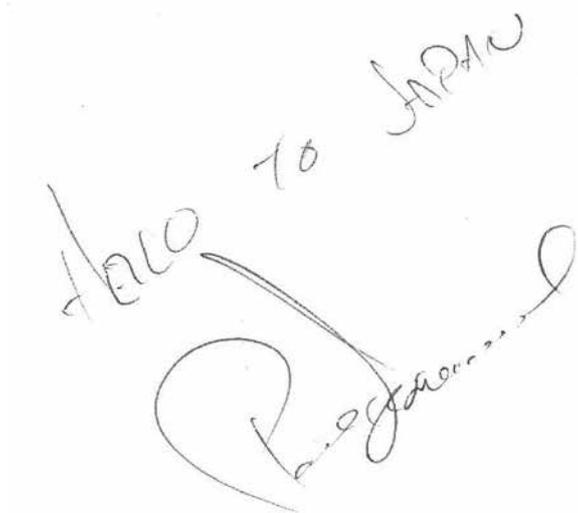


MJQ の John Lewis (Best Wish Sincerely とサイン) と Percy Heath (Best of Life と彼の眼鏡とベースのサイン) 1973 年。



私の名前を入れた Gerry Mulligan のサイン

彼ら以外の白人奏者としてユニークな存在は Take Five というジャズにしては珍しい 5 拍子の曲を作曲したピアニストの Dave Brubeck の四重奏団だ。アルトサクソを吹く Paul Desmond はクールなウエストコーストジャズの代表格で、Brubeck のグループでなくてはならない存在だ。



サクスのソロも細いが字も細い Paul Desmond のサイン (Helo to Japan)。

4.4 ジャズヴォーカル

ジャズには優れたヴォーカリスト達も多数存在する。W. C. Handy の作曲した多くのブルース曲には歌詞がついているので、本来ジャズは歌うものであったのかもしれない。楽器演奏と同様、ジャズの歌い手は即興的な節回しを使い、ムードを盛り上げる。ジャズでブルースの女王と言われている歌手は 1920 年代に活躍した Bessie Smith という黒人の歌い手だ。彼女の歌は殆どが 12 小節のブルースで、この歌を聴けばブルースとはどんなものがよく分かる。日本の流行歌や白人の作曲したジャズの多くは 16 小節単位で、4 小節ずつに分けて所謂起承転結があるが、12 小節のブルースでは最初の 4 小節が起、次の 4 小節が承、そして残りの 4 小節に転結がある。

流行歌のブルースと言え、淡谷のり子以外に、僕の好きな、ジャズ調に歌う西田佐知子がいる。彼女の歌った「東京ブルース」は多くの日本人を感動させ、自殺を試みた人すらいると言われているが、この曲はブルースでなく、16 小節の短調の曲だ。http://youtu.be/mqD0p1pL2vo。しかし彼女が歌うと何となくジャズ調に聞こえるのは、彼女がジャズ歌手のように和音だけの伴奏で歌い、尚かつ、感情のこもった歌い方をするからだろう。

ジャズ歌手で Bessie Smith の直系の歌手と言われ、黒人達の悲哀を巧みに表現する人に Billie Holiday がいる。彼女の歌は Teddy Wilson らと共演した若くて

かわいらしい 1930 年代の頃と麻薬に溺れ声がへしゃげて来た 1950 年代の頃では全く違う。僕は後の時代に恋人の Lester Young のテナーをバックに歌った「Fine and Mellow」(コロンビア) が大好きだ。レコードの方が音はいいが、YouTube でも殆ど同編成で聞くことができる。このレコーディングはブルースの本当の妙味を知る為にも、また、素晴らしいジャズのヴォーカルと、その合間の一流のミュージシャン達の即興のソロを聴く上にも良い参考になるので是非聞いてみて欲しい。http://youtu.be/sXRYdcQ6bbM

この YouTube を開くと CBS のアナウンサーによる当日でのスタジオ録音の解説とメンバーの紹介がある。続いて Billie の歌の説明があり、演奏が始まる。4 小節のイントロの合奏の後 Billie の歌が始まる、歌詞は
My man don't love me, treats me oh so mean
My man, he don't love me, treats me oh so mean
He's the lowest man, that I've ever seen

ここで Ellington Band の Ben Webster の 12 小節のソロが入り、続いて Billie の恋人、助平顔の Lester Young が現れ、独特のビブラート無しのテナーのソロをする。この時の Billie の顔には正に恋人としてのうっとりとした表情と、うなずきが見える。続いて Billie の歌、

He wears high-draped pants, stripes are really yellow
He wears high-draped pants, stripes are really yellow
But when he starts in to love me, he's so fine and mellow

ここでスイングジャズのトロンボーンの名手 Vic Dickenson のソロ、続いて珍しく、当時未だ若い、前述のウエストコースジャズの白人のバリトンサクソ奏者 Gerry Mulligan がおずおずとソロを始める。(レコード盤には Mulligan は登場しない。Billie が断ったのか?)、Billie の歌が続く、

Love will make you drink and gamble, make you stay out all night long
Love will make you drink and gamble, make you stay out all night long
Love will make you do things that you know is wrong.

ここでデキシーランドジャズ時代からモダンジャズ時代まで活躍している Coleman Hawkins のガラガラ声のテナーのソロが1コーラスと、スイングジャズのトランペットの名手、Roy Eldridge のハイノートのソロが2コーラスずつ続く。そして最後の Billie の歌が入る。

But if you treat me right baby, I'll stay home every day

Just treat me right baby, I'll stay home night and day

But you're so mean to me, baby, I know you're gonna drive me away

Love is just like a faucet, it turns off and on

Love is just like a faucet, it turns off and on

Sometimes when you think it on baby, it has turned off and gone

この画像を見ると Billie の横顔はどこか日本人の血が混じっているように見えるのは私だけだろうか？ジャズとは何かと聞かれると、この曲を聴いてもらうのが一番だと思っている。ここでは、伝説的ジャズヴォーカリストの Billie がジャズの基本である 12 小節のブルースを「Fine and Mellow」という小唄を基にして素晴らしい歌で聴かせてくれる。更に、一流の

ミュージシャンらがこの曲のブルースコードを基にした即興演奏を、次々と 1 コーラス (12 小節) ずつ奏でてくれる。ミュージシャンらは原曲と、Billie の歌に其々の解釈を与え、自分の個性でそれを表現している。彼らのソロは誰一人として似通ってないオリジナルなものだが、しかし共通した原曲の節回しと Billie のブルースに合わせようとする心情がある。正にこれこそがジャズの妙味である。ジャズは頭でなく、soul と heart で楽しむものだ。幾つもの YouTube を紹介したが、このビデオだけは是非見てほしい。そして私の言う意味を分かってほしい。人生が豊かになる。

終わりに

今回は趣を変えてジャズの話にした。幸いネットのおかげで YouTube を通じてオリジナルを聞いてもらえるので百文は一聞に如かず、私の下手な解説より、直接聞いていただき、私が言いたいことを感じ取っていただけると幸いだ。特に最後に紹介した Billie の「Fine and Mellow」はその一聞に値する。この文を書くにあたり、学生当時よく一緒にコンサートをやった市大出身の西坂友宏氏（現在阿倍野の本屋の旦那）にいろいろコメントを頂いたことに謝辞を述べたい。

(通信 昭和 32 年卒 34 年修士)